

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第五十七回）

たがはの

「誰葉野」

・万葉集には本歌のあとに「或本（あるほん）の歌に曰く」と書かれたものが多く見える。

佐々木信綱氏著「萬葉辞典」によると「或本」とは、その本の名称・類別など不明であるが、万葉集編纂の際に参考とした別本をさすとある。

筑紫（九州）にも柿本朝臣人麻呂の歌集に出ている次の「物に寄せて思いを述べる」歌の編纂の際に参考にしたとされる或る本の歌がある。

あさはの

浅葉野に 立ち神さぶる

すげ

菅の根の ねもころ誰ゆえ

わ

我が恋ひなくに

卷十二—2863

（解説）浅葉野に、古さびて生い立っている菅の根のように、ねんごろに、しみじみあなた以外の誰故にも私は恋をしたりはいたしませんに。

「ねもころ」とは、ねんごろ。

「浅葉野」は、所在未詳。武蔵説（現・埼玉県坂戸市浅羽野）、遠江説（現・

とおとうみ

静岡県袋井市浅羽町）があるがいずれとも決めがたいとの説がある。

【或る本の歌】

・万葉集には前記本歌のあとに「或る本の歌に曰く、誰葉野に立ちしなひたる」とある。

これは本歌の初めの二句「浅葉野に 立ち神さぶる」の異伝として「誰葉野（だがはぬ）に 立ちしなひたる」であるとしている。

たがは の

誰葉野に 立ちしなひたる

すぎ

菅の根の ねもころ誰ゆえ

わ

我が恋ひなくに

（解説）【誰葉野】は、『古義』には「和名抄（平安時代中期に作られた辞書）に豊前国田川郡、延喜式（平安時代の法令集）には同国田河駅とある。

この田河の野をいへるや。」とある。

また、【万葉辞典】には「福岡県田川付近の原野と思われるが、古の田河駅址であるという今の香春町付近か。」としている。

これらの説に従えば、誰葉野は今日の香春町にあった野ということになる
とある。

【立ちしなひたる】の「しなひ」は茂って靡（なび）く意。

・この異伝の歌も柿本朝臣人麻呂歌集とあるが、その地の民謡であろうとの説がある。

・香春町は福岡県東北部に位置する田河郡の北東端にあり、北部には玄界灘に面する北九州市の小倉南区、また、東部は古代に豊前国の国府があった福岡県京都郡に接し、さらに香春町から東へ14 km程先には瀬戸内海南西端の周防灘に面する福岡県東部の行橋市に至る。

・香春町は奈良、平安時代に對外防備および九州を総括・管理するために現在の福岡県中西部にある太宰府市に置かれた統治組織「大宰府」から70 km程離れた位置にあり。瀬戸内海を経て畿内にある都とを結ぶ重要地点であった官道「田河道」の一駅として「田河駅」が設置されていたとされ、都から大宰府に赴任するため、あるいは豊前国府への用務の為に利用するなど交通の要衝として栄えたと伝えられる。このことから万葉集にも香春に関連した歌が数首詠われており、本シリーズ第三十一回、第三十四回でもこの地で詠われた歌を掲載している。

(参考文献) 佐々木信綱氏著「萬葉辞典」福岡県の地名辞典、(澤瀉久孝著「萬葉集注釈」滝口弘著「九州の万葉」など)

(写生地)

・香春町の中心部から北側にそびえる小山魂。古代から町のシンボルであった香春岳がそびえる。手前、南から北に一ノ岳(標高約二五〇メートル)・二の岳(標高四六八メートル)・三ノ岳(標高五一一メートル)と称される三つの峰で構成される。一の岳は良質の石灰石が採れるため、昭和

10年から大規模な採掘が始まり頭初、標高四九一メートルであったが徐々に削られ、今では中腹から上が切り取られ、半分の高さ約二五〇メートルの台地状の景観を呈している。小規模ながら急峻な香春岳の山魂は、その特異な景観から香春町はもとより田川郡を象徴する山として親しまれている。

・古代の「誰葉野」と呼ばれた地と思われる香春町にそびえる香春岳と周辺
の野などを描く。
(池田杏花)

